

二強てサガ11

N E W S A G A

終わらぬ英雄譚

阿部正行

Abe Masayuki

目次

本編
7

番外編
四年前と四年後
259



美しきエルフの精霊使い。
カイルの前世での恋人であり、
今は妻の一人。

ウルザ

カイルの幼馴染で、
女の子に目がない
ムードメーカー。
その実、史上最高の
剣の天才。

セラン

シルグス王国の美しき王女。
逝去した父に代わって
国を取り仕切っており、
ついに戴冠式を迎えるが…

ミレーナ

グロリーエス
かつて「輝かしき」と呼ばれた
スーラ聖王国の元・聖王女。
還俗してカイルの妻になった。

サキラ

シルドニア

マジックキング
伝説の『魔法王』が
自分の人格や知識の
一部を複写した
魔剣の精神体。
とどまる事を知らない
食いしん坊。

ミナギ

闇の技術を受け継ぐ
「シノビ」一族出身の残念美女。
カイルの妻の一人でもある。

リーゼ

料理と格闘の才能に溢れるカイルの
幼馴染。戦いの旅を終え、カイルの
妻の一人に。

カイル

主人公の魔法剣士。
過去に戻って魔族との戦争の
流れを変え、様々な二つ名を
持つ「英雄」となった。

主な登場人物
Main Characters

プロローグ

それは現実離れた光景だった。カイルは眼前で起きている理解しがたい現象に、呆然^{ぼうぜん}となっている。

ジルグス王国の首都マラッドの中心部にある、神々の主神たるカイリスを祀^{まつ}る大聖堂。他国にも知れ渡る、ジルグス国を象徴する建造物の一つだ。

女神カイリスを鮮やかな色彩で描いたステンドグラスや、ジルグス建国神話の壁画をはじめ、備え付けの椅子の細部にまで装飾が施された、豪華^{ごうか}絢爛^{けんらん}かつ神聖な雰囲気^{ふんいき}の漂^{ただよ}う場所である。

だが今は喧噪^{けんそう}と怒号^{どごう}が響き、燃え盛る炎が容赦なく壁や床を焦がし、天井は崩れかけるなど、ひと言で表すならば戦場のようなありさまとなっている。

そんな厳肅^{げんぷく}であるべきはずの場にそぐわない騒ぎの原因であり、その中心にいるのが、カイルの眼の前で向かい合う二人の人物。

一人は、この国の主^{あるじ}とも言うべきミレーナ王女だ。身にまとった純白のドレスは装飾が少なく、特に豪華^{ごうしゃ}というわけではないが、それがかえって『ジルグスの至宝^{しほう}』とまで呼ばれた彼女自身の美

しさと気品を際立たせている。

そしてもう一人は、純白のミレーナの対極にあるかのような、全身を禍々しい漆黒の鎧で覆った並外れた巨体の黒騎士だ。異様異形の黒騎士はその手に持ったやはり歪な大剣で、眼前のミレーナへと叩きつけるが如き斬撃を繰り返していた。

自身に迫る鉄塊のような剣を、ミレーナは気丈にも眼をそらさず見据えている。しかしその命が風前の灯火なのは明らかで、次の瞬間には惨劇が訪れるだろう。

しかしその『次の瞬間』は訪れない。

その状態で、両者とも彫像のように微動だにしないのだ。

それはまるで英雄譚的一幕を切り抜いた絵画のような、ある種の神秘的な美しさを感じさせる非現実的な光景。

もしくは全てが幻や夢の中の出来事のような気さえしてくるものだった。

「どうなっているんだ……？」

全身を激痛と嘔えようのない虚脱感に襲われ、床に倒れたまま身動きのできなかったカイルが、絞り出すかのように声を出す。

そして周りを見渡して気付く。ミレーナと黒騎士だけではなく、全てが静止していることに。人の動きだけでなく、炎は揺らめきもせず、破損した天井から落下してくる瓦礫も宙で止まっている。



何もかもが停止した世界。これまで数々の超自然的現象と関わってきたカイルでも、自分の眼はおろか正気かどうかさえ疑いたくなる状況だ。

「何が起こっているんだ……」

耳が痛くなるような静寂の中、困惑するカイルの声が響いた。

1

「戴冠式が行われることはご存じでしょうか？」

リマーゼにある自宅の応接間でカイルがその知らせを聞いたのは、遡ること一月前のこと。

発言した二ノスはまだ少女と呼ぶのが相応しい年齢だが、ミレーナが信頼を置いている側近の侍女だ。

だからこそ、今回のようなミレーナからの密命を帯びた使者を任されている。

「ええ、勿論知っています、心よりお祝い申し上げます」

この少女から良い感情を持たれていない、というか警戒されている自覚があるので、カイルは妙に緊張した面持ちで背筋を伸ばし、型通りの祝福の言葉を述べる。

これで済めばいいが、と思うが、当然ながらそうはいかない。

「ありがとうございます。それで、ミレーナ様は戴冠式にカイル様を是非招待したいと」

予想していたことではあるが、当然のように差し出された招待状を見て、カイルは内心ため息を吐く。

戴冠式とは正式な王になるための儀式であり、二ノスの言う戴冠式とは勿論ミレーナが行うもので、彼女はいいよよ正式に女王として即位することになった。

先代の王であるレモナスが亡くなってからもう四年以上が経つが、ミレーナは王女のまま政務を執っており、未だに女王として即位していない。

これはレモナスが急死であったことや、ガルガン帝国で起きた内戦に影響される形での政情混乱、そして魔族との戦争など、様々な要因があったためだ。

王女のままでも統治に問題はなかったが、やはり王がいらないというのはあるべきものがないということ、国民にそこはかとな不安があったのも事実だ。

最近になってこれらがようやく落ち着いたことで、ついにその時が来たと国中で話題になっており、『シルグスの至宝』として国民人気の高いミレーナの正式な即位は大いに祝福されている。

「招待いただき誠に光栄なのですが、少々都合が……」

「幸いカイル様も予定は全くないようですので」

『全く』の部分強調しながら二ノスは遮るように言う。

「その……何と言いますか……自分は出席しない方がいいのではないかと」

ある程度自分の立場と内心を知っているであろう二ノスに対し、カイルは硬い表情と声で難色を示した。

これまでも、ジルグス国からの爵位の授与は勿論、戦勝記念の式典などへの出席も様々な理由をつけて断っている。

「はい、そうかもしれませんね」

齒に衣着せぬ二ノス。これは、主人であるミレーナがカイルに気を許しすぎていると思っているため、その分自分が警戒しなければ、と威嚇に近い態度をもつて接しているのだ。

カイルもそれを解っているの、気にする様子はない。

「それでも最低限の付き合いは必要です。ミレーナ様がカイル様と不仲を疑われるのもまた問題です」

邪推されても困ります、と二ノスは不本意だと言わんばかりの顔だ。

今まではジルグス国側も、カイルの意思を尊重してか、この手の式典への出席を要請することはあっても、無理強いをすることはなかった。

だが流石に戴冠式は、ジルグス国にとってもミレーナにとっても、最重要と言っている儀式だ。

国家としての体面もあるため、何としてでもカイルに出席してもらうという意気込みが感じられる。

「それに先ほども言いましたが、カイル様も暇……予定はないようですので」

重ねて言う二ノス。実際、カイルに予定はない。全くとっていいほどに。

つい半月ほど前までは忙しく大陸中を巡り、様々な世界の危機に対応していた。だが、どれも一朝一夕に解決できるものではなく、とりあえず経過観察（棚上げや先送りとも言いが）ということに落ち着き、戻ってきたばかりだった。

とにかく、カイルとしては念願だった、何年振りかの平穏な日々をようやく送りつつあったところだ。

「それに体調の方も問題ないようですね、もし何かありましたら、医療神官をすぐに派遣しますので最後の手段、仮病に関しても先回りされる。

「……前向きに検討させていただきます」

仕方なく玉虫色の返答をして、カイルは頭を下げた。

二ノスが「また来ます」と念を押して帰った後、全身に疲労を覚えたカイルはソファに突っ伏した。「カイルは出席したくないの？」

そんなカイルの横に座り、小さな子供に話しかけるように言うのはリーゼだ。

「面倒くさい……俺はもう一生分働いた自負がある。残りの人生はひたすら自堕落に、怠惰に生きたい」

「またそんなことを……」

働きたくない、とダメ人間の極みのようなことを言うカイルに、リーゼは軽いため息を吐く。が、実際カイルの頑張りを知っているだけに強く言うことはなく、優しく突っ伏した頭を撫でている。

幼馴染でばば赤ん坊の頃からの付き合いなのだが、リーゼの生まれが数か月早いため、このように姉が弟にするかのような態度で接することがあった。

「あまり甘やかすのもどうかと思うぞ」

そんな二人を見て窘めるように、しかし少し羨ましそうに言うのはエルフのウルザだ。

「カイルの気持ちは解らないでもないが、そうも言っていられない。人間社会で生きていくには、避けられないしがらみというやつがあるのだろう？」

元々閉鎖的な文化のエルフだが、だからこそ人間社会というものを学んだウルザが言う正論には、カイルとしても反論ができない。

「……俺はただ放っておいてほしいだけなんだが」

「あれだけ大それたことをしておいて、放っておかれるはずないじゃない」

カイルのぼやきに呆れとも言える表情と口調で言うのはシノビのミナギ。彼女の言う「大それたこと」とは、世界を救った大英雄になったことだ。

後の世で『大侵攻』と呼ばれる魔族による総攻撃で、人族はそのほとんどが死に、全滅寸前にまで追い込まれる——はずだった。

魔族が攻めてくることを知っていた、正確には経験していたカイルは、事前に備えていた。この

『備え』とは、人族全体に影響を持ち、まとめ上げることのできる英雄になること。

そしてカイルは世界を救った。

「必要だったのは理解してるけど、少しやりすぎたのも事実よね」

ただ、全人族をまとめるに際して、相手の弱みを握って半ば脅しとも言える手段を使ったこともある。暗殺も含めた闇の技術を継承するシノビの一族であるミナギは、その脅しの部分に深く関わっていた。

そんなミナギには、カイルは良い意味でも悪い意味でも放っておけない存在なのだとよく解っているからこそその発言だった。

「平時における有事の英雄、これほど扱いに困るものもないのう」

先の三人は僅かなりともカイルを気遣っているところもあったものの、それとは違って完全にかかう口調なのはシルドニア。

見た目こそ少女だが、彼女は人族史上最も栄えた古代魔法王国ザールレスを治めた『魔法王』の複製とも言えるべき魔法生命体である。

シルドニアの言う通り、カイルの存在、そして扱いは、色々な所で問題になっている。

先の戦争におけるカイルの功績は非常に大きく、世界的な名声を得ており、当人が望めばどのような地位にでも就けるだろうが、カイルの望みは平穏だ。

ただ、平穏と言えば聞こえはいいが、要するに何もしたくないということ、世間からすればそ

うはいかない。

戦争が終わったからと言って、その影響力が消えることはない。

影響が大きいということはつまり利用価値があるということで、それは同時に邪魔な存在にもなりうるということ。放置することとまた問題を生むのだ。

「まあ排除ではなく、取り込もうという方向なのは朗報だ。あの釣書つりがきの山を見ればそれは一目瞭然」シルドニアが指したのは、部屋の片隅に山と積まれている見合い用の絵姿で、それを思い出してカイルはげんなりとなる。

カイルを巡って互いに牽制し合っている人族最大の国家ガルガン帝国と、それに匹敵するジルグス王国。その眼を気にしての暗黙の了解なのか、どこからも直接的な勧誘はない。

しかし抜け道というか例外として、カイル本人が望めば問題ないばかりに、世界中から色々な理由をつけて釣書が送られてきているのだ。

要するに、古今東西で行われている政略結婚のために。

「どう考えても女好きと思われておるからな」

シルドニアが部屋を見回し、面白そうに笑う。

現在のカイルの住まいは、実家を増築した所謂二世帯住宅である。そこでリーゼ達見目麗しい女性陣と同居しているのだから、世間からの評価はどうしてもそうなる。

更に『竜殺し』をはじめとするカイルの数々の英雄譚の中には、数多の女性と浮名うななを流したとい

うものもあり、あまつさえ美少年にまで手を出した、とすら伝わっていた。

英雄色いゆういろを好む、ではないが、それぐらいは許される功績はあるものの、『好色英雄』という不本意で不名誉な二つ名も広がっている。

「完璧な英雄像よりも、欠点があつた方が親しまれやすいものだ……外から見れば妾めかけも入っておるようだから、釣書の中には幼子も含まれているのだな」

女好きだけでなく幼女趣味もあると誤解されているようだ、と完全に面白がつているシルドニア「何か問題が起こつたとき、色仕掛けが効く相手……そう思われておくことも大事だと言つたのはお前だろ」

カイルがジロリと睨む。女好きという噂が広まり始めた頃、慌てて否定しようとしたのを止めたのはシルドニアだった。

「お主も納得したであろう。つけ込める隙をわざと作っておけば、敵対するのではなく懐柔かいじゆうを試みてくる可能性が上がるものだ」

「……こうとまでなるとは予想してなかった」

「まあ希望的観測だったのは間違いないのお」

からからと笑われ、カイルはますます落ち込む。

（戦争の英雄なんて、平和な時代には面倒な存在でしかないのは解っていた。だから引っ込んでおこうと思ったんだが……やはり甘かつたとしか言いようがないか）

思い通りにはいかないものだな、とカイルは内心でため息を吐く。

「……結局のところ、権力とはつかず離れずの関係を続けた方がいいということだな。戴冠式は付き合いの一つとして出席すべきだろう」

それぐらいはしろ、と処世術を語るウルザに、リーゼやミナギも頷いた。

「お客様は帰られたのですか？」

そう言いながら応接室に入ってきたのはサキラだった。その腕の中には、カイルの妹であるアレサがいる。現在三歳で、先ほどまで外で元気に走り回っていたのだが、遊び疲れたのか今は眠りについていた。

サキラは『輝かしき』^{グロリーエス}の二つ名を持った元聖女で、ミレーナ王女にも劣らない美姫として世界的に有名だ。

彼女は本来なら神の代理人とまで呼ばれている聖王^{せいおう}となり、全世界の宗派の頂点に立つべき人物だった。

だが最近の彼女はといえば、リーゼに家事を習い、家の裏に菜園を作って野菜を収穫し、アレサと遊ぶのを何よりの楽しみとしているなど、ごく普通の村人のような暮らしをしている。

「ミレーナ様からの戴冠式の御招待だったのでしょうか？ さぞ絢爛^{けんらん}な式典になるでしょうし、私も楽しみです」

サキラは、ある事情で修道院に入らなかった自分が今の暮らしをできているのはミレーナの

おかげ、と恩義を感じており、純粹に祝おうとしていた。

「いやその……どうするか……迷っているところなんだ」

期待に満ちたサキラに対し、カイルはまだ煮え切らない態度をとる。

「まあ」

サキラは驚いた顔をするものの、すぐに気を取り直す。

「でも、縁があった人の晴れ舞台なのですから、お祝いするために出席するべきなのでは？」

「……………」

一般常識とも言うべき意見を述べるサキラに、カイルは言葉が詰まる。

以前は良くも悪くも浮世^{うきよ}離れた性格だったサキラだが、こうしたところはカイル達の中で（シルドニアを除けば）一番年上らしいと言える。

「それに、本当に何もしない生活、というのもしかと思うよ」

現在のカイルの日常を思い出してリーゼが悩ましそうな声を出すと、その他全員が大きく頷いた。強さを維持するための鍛錬^{たんれん}は日課として行っているが、それ以外は精々^{せいせい}本を読むか、たまに散歩をする程度だ。

カイル自身はこういった生き方が性に合っていると思っているが、リーゼ達からは老後の隠居のような生活だと揶揄^{やゆ}されている。

「このままカイルの望み通りになったら、アレサはずっと家でぐうたらしている兄しか見ていない

ことになるわね」

眠っているアレサを見ながら、ミナギが呆れたように指摘してくる。

「うぐ……」

将来妹から向けられるであろう冷たい眼を想像して、流石に応えた顔になるカイル。

「それにいずれば……」

現在は世界の危機がいくつかあるため、警戒の意味もあつて避けてはいるが、そう遠くない未来に増えるであろう家族を——自分の子供を想像して、リーゼのみならずウルザやミナギにサキラも少し顔を赤くする。

「ふむ、将来『お父さんは何でいつも家で寝てばかりなの？』と言われるわけか。冷えた家庭になりそうじゃな」

シルドニアが妙に現実感のある未来を指摘し、カイルは顔色が悪くなる。

「確かに教育に悪いな……」

同じように想像したウルザがため息を吐く。

「そもそも普通の家庭環境とも言い難いのに」

ミナギも頭が痛いとはかりに額に指を当てて眉をひそめる。

「そうなるというそのこと子育ては別の家で……効率で言うならカイルを別の家に移せばいいのよね」

家主であるカイルを除外する案をリーゼが出すと、他の面々もそれもありかと頷く。

「いや、いくら何でもそれは……」

「カイルは黙ってて」

「はい……」

女性陣の仲がいいのは喜ばしいことだが、仲が良すぎて時折自分が邪魔者扱いになるのは流石にどうかと思うカイルだったが、これ以上は口を挟めなかった。

サキラはこういったノリにまだついていけないのか会話にこそ加わっていないが、慣れてきてはいるようで笑顔で見守っている。

シルドニアは当然のように面白がっているだけだし、孤立無援のカイルは自宅なのに帰りたい気分になりつつ、天井を眺めながら諦めたように大きく息を吐く。

「働くか……」

こうしてカイルは戴冠式に出席することを決めたのだった。

2

「じゃあ戴冠式に出席するのね」

その日の夕食時。食事はできる限り家族全員でとる、という方針によってレナード家が勢揃いする中、嬉しそうに声を上げたのはカイルとアレサの母親であるセラリアだ。

全員が座れる大きなテーブルには所狭しと料理が並べられており、真ん中に今日のメインとなる鶏の丸焼きが豪快に鎮座している。

その他にも裏の畑でとれた香草による鶏肉の包み焼き、時間をかけて煮込んだ鶏肉のシチュー、チキンパイなど、鶏尽くしだった。

「いや、まだ正式に決めたわけじゃ……」

切り分けた丸焼きを口に運びつつ、微妙に目をそらして悪あがきするかのように口を濁すカイルだったが、セラリアはお構いなしに続ける。

「よかったわ、カイルがこのまま引きこもりになるんじゃないか、って心配してたのよ」

煮込まれた鶏肉にかぶり付き、顔の下半分を汚しながらも懸命に食べているアレサ。その世話をしながらも上機嫌のセラリアに、カイルは顔をしかめる。

「母さんの言う通りだぞ、カイル」

アレサを挟んでセラリアの右側に座り、静かに同意したのは父親のロエールだ。

カイルにとっては影が薄く、普段はその存在を忘れがちであるのに、こういうときに限って正面に座るので無視できないでいる。

「子供が何もせず、それも女の子達の世話になってただ家にいるだけだなんて、親として恥ずかし

いし、ご近所さんにも顔向けできなかったんだから」

大きくため息を吐くセラリア。ロエールはそんなセラリアに頷きながら同意するし、面白がつてとりあえず両親の真似をしてうんうんと頷いているアレサに、更に傷つくカイル。

「誰よりも母さんには言われたくないんだがなあ……」

書痴で、他に用さなければ日が一冊書庫に籠^{こも}っている、自分以上の引きこもりである母親に反論したいカイルだったが、聞こえないように呟くのが精一杯だった。

世界を救うという歴史に残る大偉業を成し遂げたというのに、両親からのこの評価にカイルは嘆きたくなったが、同時に全く変わらない両親に安堵^{あんど}も覚えていた。

「ところで戴冠式って何をやるの？」

流石に可哀そうになったのか、リーゼがカイルに鶏の丸焼きを切り分けながら、話題を変えようと根本的な疑問を口にする。

正式な王になるための儀式、というのは知っているが、具体的に何をするかは知らないのだ。

「戴冠の儀式そのものはカイルス神様の大聖堂で行われるわね。その後で王都を廻^{めぐ}るパレードがあり、夜には晩餐会が開かれるわ」

リーゼの質問に答えたのはセラリアだ。

「近年では新王のお披露目^{ひらめ}と国威発揚を目的としたパレードや、国の内外から賓客^{ひんきやく}を招いての晩餐会の方が注目されているわね」

かつて大国ガルガン帝国で宮廷魔道士を務めたこともあるセライアが、見かけによらない博識なところを見せる。

「招待状によると、大聖堂で行われる戴冠の儀式に招待されているのは……カイルとサキラだな。カイルのことを頼んだ」

ウルザが招待状を見ながら、サキラに声をかける。

「は、はい！ 頑張ります！」

責任重大、とばかりに気合を入れて力強く頷くサキラ。

「晩餐会の方には全員招待されているけど……ああいうのって何度出席しても慣れないのよね」

リーゼが軽くぼやく。この手の催しにはカイルに同道して何度も参加しているのだが、根が小市民のリーゼにしてみれば、いつまで経っても遠い世界の出来事だった。

「私も似たようなものだが……最近、ああいうのは周りを気にしないというのが一番だというのが解った」

「出てくる食事は、美味いことは美味いんだが、あまり量を食べれんのがなあ」

ウルザは開き直りともとれる発言をし、シルドニアは全く違う心配をする。

「パレードも楽しみですね、ジルグス国の儀仗兵による式典は、煌びやかで他国でも有名なくらいですから」

「そう言えば今回のパレードは、特別な仕掛けがあると噂を聞いたわね……何をやるのかしら？」

サキラとミナギの興味は既に次の話題に移っている。

「でも結構急だね。布告から式までもう少し準備期間があってもいいと思うけど……」

ロエールの疑問にセライアが答える。

「王家にとって吉日だからよ。これを逃すと当面は戴冠式に相応しい日がないから……アレサも初めての王都だから楽しみよね」

「うん！」

三歳児には王都も戴冠式もよく理解できていないが、皆でお出かけ、ということだけは解ったようで、アレサは満面の笑みで大きく返事をした。

そんな様子を見て、もはやこの流れは止められないか……と諦観していたカイルだが、ふと思いついたようにテーブルの隅に眼を向ける。

「ところでお前はどうするんだ？」

「ん……？」

だらけ切った態度に締まりのない表情、いかにも興味なさそうな声で返事したのは、会話に加わらず黙々と食事をしていたセラんだ。

セランはこの家に住んでいるわけではなく、近所の自宅で生活しているのだが、自活能力は低いので、ご飯時になると必ずたかりに来ている。

傍から見ればだらしのないダメ人間でしかないものの、それでも剣の腕だけは人族最高峰で戦闘の

天才だった。

「一応お前も招待客の中に入っているぞ」

「あゝ……行けたら行く」

一瞬だけ考えるようなそぶりを見せた後、何も考えてなそうな声で返事をするセラン。

「どうかお前、何でもここにいろんだ。ホミロウに行くんだろ？」

カイルの言葉に、セランの手がピタリと止まり、何とも言えない表情になる。

ホミロウとは魔族領にある都市で、そこには魔王ルイーザがいる。ルイーザはセランに惹かれており、セランもルイーザを憎からず思っている、そんな間柄だ。

「それともあれか……やはり魔族とは色々と問題があるのか？」

元来人族と魔族は不倶戴天の間柄で、両者の戦争が終わってからまだ一年と経っておらず、その爪痕は深い。

カイル自身も魔族に関しては思うところはあるが、それでも二人の関係に反対ということはなかった。

「俺がそんなこと気にするわけねえだろ」

「確かに……なら早く会いに行け。お前はいつまでもふらふらほつつき歩いてないで、少し落ち着くべきだ」

「所持持ちになったからって、上から目線になりやがったな……お前こそ家に閉じ籠ってないで少

しは出歩け」

「……放蕩者」

「……引きこもり」

両者とも手にしたフォークをお互いにガシガシと突き付け、罵り合い始める。

そしてある程度続けた後、これ以上騒いだらリーゼに怒られるだろう、というタイミングで切り上げて食事に戻った。

「……別に会いたくないわけじゃねえよ、ただユーリガの奴がなあ……」

セランはルイーザの忠実な側近である女魔族の名を出して、苦々しい顔になる。

「少しは俺のこと認めているらしいが、それならそれでルイーザに相応しい態度を取って口うるさくしてやがねえ」

ユーリガの小言を思い出したのか、大きく息を吐く。

「なるほど……」

どうやらまだまだ時間がかかりそうで、カイルとしてはこれ以上口を挟むつもりはなかった。

「……そういえば聞いたことがある。王都マラッドの辺りには、ザーレスの時代の巨大な遺跡があったと」

他愛なくも賑やかな会話が続く中、ウルザがふと、昔を思い出したかのように言う。

「ええ、そうね。何の遺跡かは解らないけど、都市の規模だったそうよ。ジルグス王家はその管理者の子孫……と言われているわね」

セラリアが補足するように言葉を続ける。

「どういう都市があったんだ？」

カイルが尋ねると、そのザーレスで『魔法王』と呼ばれるシルドニアは、齧り付いてリスのように口いっぱい頬張っていた鶏のモモ肉を飲み込みながら考え込む。

「……さて、どうであったか……ザーレスは規模が大きくなりすぎて、妾が把握しておらんものも多い。当時は普通の都市だけでなく、地下都市や、計画だけなら海底都市なんぞもあったしなあ……」

そこまで言ってシルドニアはふと首を傾げる。

「そういえば建設途中じゃった対魔族決戦用の空中要塞都市……ザーレスが滅んだ後、どうしたんじゃないってわけ？」

ちよつとした忘れ物を思い出そうとするかのように、うーむと天を見上げながら唸るが、すぐに「まあいいか」と何でもないとこのように流す。

「さらつとんでもないこと言うな……これ以上世界規模での面倒事を増やさんでくれ」

その面倒事を解決するのは自分の役割になる、と自覚しているカイルが眉間を指で揉む。

「とにかくあそこら辺の地は妾の管轄外であった、詳しくは知らん」

話は終わり、とばかりに食事を再開するシルドニアに、カイルもそれ以上聞くことはない。

その後も女性陣はわいわいと楽しげに語り、戴冠式が終わった後はどこそこを観光しよう、何を土産に買おう、などとすっかり家族旅行の雰囲気になる。

「そもそも王都には行きたくないんだがな……」

誰にも聞かえないようにカイルが呟く。王都マラッドはカイルにとって会いたくない人がおり、行きたくない場所があるので、気が進まないのだ。

「でも避けてばかりもいけないか……」

手元のシチューをかき混ぜながら、カイルは軽いため息を吐いた。

3

戴冠式の二日前、カイル一行は王都マラッドに到着した。

「凄い人だかりよね」

お祭り騒ぎと言っている賑わいに、お上りさんのようなことを言うリーゼ。王都に初めて来たわけでもないし、世界中を旅してこういった光景も見慣れているはずだが、それでも少し気圧されている。

大通りは人をかき分けて進まねばならないほどの混み具合だが、特徴的なのは皆が笑顔だという

ことだ。

魔族との戦争が終わり徐々に復興していく中、人気の高い新しい女王が誕生するというこれ以上ない慶事に、王都が、国中が浮かれているようだった。

「アレサちゃんやお義母様達も来られればよかったのですが……」

振り返ってリマーゼの方を見ながら、サキラが残念そうな声を出す。

セラリアとロエル、そしてアレサ。家族での旅行という初めての経験を楽しみにしていたのだが、出発直前にアレサが少し体調を崩し、発熱してしまったので、遠出は控えて留守番をするこ
とになってしまったのだ。

「何でもいいから飯食おうぜ、腹減ったあ」

代わりと言っては何だが、来るの出来ないのか解らなかったセランが結局ついてきている。

そもそも戴冠式のことを忘れてふらついていたセランと、リマーゼの街を出発しようとしたタイミングで丁度行き会い、じゃあ俺も行く、とその場の勢いで決めたのだった。

「完全に気分で生きているなお前は」

「自由に生きていると言ってくれ。お前みたいになんたくねえ」

セランがカイルを見ながら何とも言えない顔をする。

現在のカイルはフードを目標に被り、周囲から顔が解らないようにしている。これはこれで悪目立ちするが、正体がバレるよりはましだろう。

知名度が高くなってしまったので、こうでもしないと自由に行動できなくなってしまっていて、これもまたカイルが故郷に引き籠っている理由の一つだ。

「しかし戴冠式ねえ、そう言えばまだ正式に女王にはなっていなかったんだな……何でだ？」

「普通に考えれば、最も効果的な時期を見計らっていた、であろうな。現に戦争を終わらせ、新しい領地も増えて復興しつつある今は、弾みをつけるのに悪くはないと思うのじゃが……」

すぐになればよかったのに、と今更ながらセランが呈した疑問に答えたシルドニアだったが、街中を巡回している兵士を見ながら難しい顔で首をひねっている。

「何やらピリピリしとるといふか……妙な緊張感が漂つとるな。重大な国事の前であるのは解るが……」

こちら辺は『魔法王』として、かつてミレーナと同じく国の頂点に立っていたシルドニアならではの考えだった。

「……まあよいか。妾も腹が減った、早く宿をとってゆっくり本格的に食事になりたいものだ」

しかしそんな難しい顔も長続きはせず、すぐに食欲を優先させる。

ちなみに、既に彼女の手には、街に入った途端露店で買った串焼き肉が握られていた。

「でもこの様子だと宿をとるのも大変じゃないか？」

国中のみならず外国からも人が集まっているので、ウルザの心配は当然と言えた。

「冬の渡り鳥亭、空いてるかな？」

リーゼが口にしたのは、王都に來た際の定宿の名前だ。

「ああ、そこら辺は心配ない。それでも正式な招待客だからな、ちゃんと宿泊場所は用意されているさ」

そうして招待状に書かれていた宿に向かうとしたそのとき、カイル達の前に、完全武装した数人の近衛騎士が現れる。

「ようこそいらつしやいました、カイル殿」

先頭の女騎士——ミレーナの従姉妹であり、近衛騎士第五隊隊長を務めるキルレンが頭を下げ、挨拶をする。

周りを憚ってか小声だが、その表情はどこか硬いようにも感じられた。

「わざわざ出迎えありがとうございます」

「これも仕事です……ミレーナ様がカイル殿にお会いしたいとのことですので、ご同行願えますでしょうか？」

後半はキルレンが更に小声になり、カイルにだけ聞こえるように言う。

「……了解いたしました」

形式としては要請でも、ほぼ強制であるのは間違いない。予想していなかったわけではなかったが、戸惑いながらもカイルは了承する。

「他の方々は用意してある宿の方にご案内いたしますので」

仲間に目配せしたカイルは、そのままキルレンについていく。

カイルを見送り、残った騎士の一人に宿まで案内されながら、リーゼ達はひそひそと話す。

「明らかに待ち構えていたよね……キルレンさんの様子も何というか……余裕がない？」

戴冠式という重大な国事の前とはいえ、妙に緊張していたことにリーゼは首をかしげる。

「マラッドに入る前から、もつと言えばリマーゼを出たあたりから監視、とまではいかないまでも妙に見られてたのよね、目的は私達ではなくカイルなのだろうけど……」

ミレーナがカイルに執心しているのは把握しているが、それにしても少し様子が変だとミナギも不審げだ。

「今更あのお姫様がカイルに害を与えるとは思わないが、何かしらに利用するという可能性はあるな」

警戒するウルザ。ミレーナの強かとも言える精神的強さはよく知っていた。

「……まあ心配するだけ無駄だろ。そもそもカイルだ、あいつが何かしらに巻き込まれるのはいつものことだしな」

身も蓋もないことを言うセランだったが、仲間達は全員が納得したように頷くのであった。



「ミレーナ様は戴冠式の予行演習をされておりますので、大聖堂内の控室にてお会いになられます」仲間達に見送られたカイルが向かったのは、王都の中心部にある宮殿の隣、戴冠式が行われるカイルス神の大聖堂だ。

この世界の神々の主神である女神カイルスを崇める者は多く、人族でも有数の大国であるジルグス国でも国教となっており、その大聖堂は国を象徴する建築物の一つである。

普段ならば王都内だけでなく国中から敬虔な信徒が集まり、礼拝が行われているのだが、現在は二日後に迫る戴冠式の準備のため、関係者以外は立ち入り禁止となっていた。

大聖堂前にある広場には巨大な天幕が張られ、その奥からは大勢が何らかの作業をしている声や音が聞こえてくる。

また、少しでも問題があつてはならないとばかりに辺り一帯を兵士が巡回し、厳重な警備が敷かれている。

ただ、そうした警戒は当然として、シルドニアが言っていた通り妙に神経質になっているようにカイルには感じられた。

周りを兵士に囲まれ物々しい雰囲気の中を歩くカイルだったが、途中でとある方向に視線を向け、少しだけ歩みを緩める。

視線の先にあるのは、大聖堂に併設されている、歴代の王を祀った霊廟や貴族の墓地がある区画だ。「どうかしましたか？」

そんなカイルに、怪訝な視線を向けるキルレン。

「いえ、何でもありません」

何かを振り払うかのようにしてカイルは再び歩き始めた。

大聖堂内に入ると、過剰と言える数の近衛騎士達が揃って緊張の面持ちで警戒にあたっており、確実に何かあるな、という感想を覚えるカイル。

だがそんな騎士達は、カイルの姿を認めるとあからさまにほっとしたような表情を浮かべた。

二階にあるミレーナ用控室の扉の前で緊張感もあらわに立番をしていた近衛騎士も、キルレンを、そしてその背後のカイルの存在を見ると、やはり安堵したかのような顔になる。

キルレンが扉をノックし、中からの返事の後で部屋に入ると、そこには間もなく女王になるこの国の王女、ミレーナがいた。

「ようこそおいでくださいました、カイル様」

直接会うのは数か月ぶりといったところだが、『ジルグスの至宝』と名高き美姫が戴冠式の本番でも着るであろう純白のドレスを纏ったその姿は、神々しささえ感じさせる。

その微笑には、自国民に向けるものとは違う確かな好意が込められており、そんな彼女の気持ちに気付かないカイル……というわけでもなく、そこまで鈍感ではないとカイル自身も思っている。

勿論そこには、王女として、そして女王になる身として、様々な利用価値があるカイルに対する打算が含まれているだろう。

だがミレーナ個人の気持ちも確かに存在していた。
そしてカイルもまた、ミレーナのことは憎からず思っている。
だからこそ気付いたのだろうか。ほんの僅かだが、カイルには微妙な陰りとでも言うべきものが
見てとれた。

戴冠式直前で、緊張や疲れなどはあつて当然だが、そこには焦燥や不安も含まれていた。
何よりカイルを見る眼、それはあることを期待した——助けを求める者の眼だ。

「ミレーナ様、何かお困りでしたら力になります」

だからか、こんな言葉が自然とカイルの口をついて出た。

ミレーナが息を呑んで驚いた顔をするが、すぐに気を取り直すと、傍らに当然のように控えてい
た二ノス、そしてキルレンに目配せをする。

村を訪れた日とは違う硬い表情をしていた二ノスは、少しだけ逡巡した後、キルレンと共に部屋
を出ていこうとする。

が、扉の前で一度立ち止まるや、

「……………」

二人してカイルに深々と頭を下げてから、何とも言えない表情のまま退室していった。

「失礼しました、ご挨拶もせず変なことを言いました……」

「いえ……嬉しかったです」

申し訳なさそうに言うカイルに対し、ミレーナは本当に嬉しそうな顔になるがそれも一瞬で、も
う余計な前置きは不要とばかりに切り出した。

「これから話すことは内密にお願いします……」

先ほどまでとはまるで違う、悲痛と言つてもいいほどの顔で、ミレーナは語り始めた。

4

ジルグス王国には、王権を象徴する三つの国宝がある。

一つは、建国した際の国法を書き記した原典である『聖典』。

一つは、初代国王の聖遺物と言われる宝石が埋め込まれた儀式用の『王冠』。

「そして最後に、カイリス神の祝福を受けたと言われているこの『錫杖』です。この三つを継承す
ることで、王位に就くことができるのです……本来ならば」

ミレーナが椅子から立ち上がり、傍らに置かれていた見事な装飾の杖を手にするが、その表情は
陰しく暗い。

「本来……といいますと？」

「はい、これは代用品でしかありません……本物は、何者かに盗まれてしまいました」

苦しげに語るミレーナ。

国宝を盗まれるなど、その国の威信にも関わる、あつてはならないことだ。

「三つとも戴冠式にしか使われないものです。王冠と錫杖は宮殿の地下宝物庫内に、聖典はこの大聖堂に保管されていたのですが……」

宝物庫は普段は完全に立ち入り禁止で、半年前に行われた一年に一度の点検のときには問題なかった。

しかし戴冠式が公表された後で改めて確認したところ、王冠と錫杖がなくなっていたのだという。「当然すぐに犯人捜しや搜索を行いました、その過程で我が国の密偵が何人も行方不明になり……そして更にあつてはいけなことが起こりました……聖典も奪われてしまったのです」

盗難が発覚した時点では聖典は無事であり、念のため警備の厳しい宮殿内に移したにもかかわらず、だ。

「何者の仕業だったのですか？」

「それが……警備に当たっていた騎士や兵士が二十人以上死傷したにもかかわらず、相手が何者かすら解っていない状況なのです」

手掛かりもない上に、手も足も出ず打つ手が全て通用しない、完全に裏をかがれている状態だということだ。

「本来なら二日後の戴冠式で私は王位に就くことができません。ただそのようことを公表するわ

けにもいきませんので、急ぎこうして代用品を用意した次第です」

悔しさを滲ませたミレーナの、錫杖を握り締める手に力が入る。

「事情は解りました。それで私はどうすれば？ 犯人捜しか、それとも国宝の搜索を……」

カイルの問いにミレーナは首を横に振る。

「それも大事ですが、次に狙うとしたら……私が標的でしょう。聖典が奪われた後に、このような物が置かれていました」

ミレーナが取り出したのは、土産物屋で売っているような彼女の姿絵で、戴冠式に際して王冠と錫杖、聖典を持った格好で新たに描かれたものだ。

そしてその顔の部分が赤く、おそらくは血を塗りとくられている。

「わざわざこの絵を使うということは……式当日に狙ってくるということですか」

一種の犯行予告であり、そして現状においてはそれが実現できるだけの力を持っている可能性が高い。

「戴冠式の場合において新たな王が命を狙われる……ジルグス国としては計り知れないほどの大打撃となるでしょう。勿論そうならないよう対策はとっていますが……ただ有効な手を打てないというのも事実で……これが今置かれているこの国の……私の現状です」

自分の状況を話し終えたからか、ミレーナは大きく息を吐く。それは抱えていたものを一気に吐き出したかのようなだった。

化粧で隠しているが、よく見ると顔色も悪い。あまり寝られていないのだろう。

一国の王となるだけでも大変だろうに、このような難事に直面したのだ。二ノスやキルレンのよう
に支えてくれる者達も多くいるにせよ、先頭に立って立ち向かわなければならぬその重圧と心
労は、とてつもないものはずだ。

ミレーナのこういったところを、カイルは素直に尊敬している。だから、助けたかった。

「事情は解りました……二日後の戴冠式、必ずお守りします」

カイルの申し出に、ミレーナはほんの一瞬だけ驚いた顔になる。

「本当に……いいのですか？」

もっと駆け引きめいたやり取りがあると思っていたのだろう。こうも簡単にカイルの方から切り
出してくるとは予想外といった感じた。

「私でよければ最善を尽くします」

カイルがそう言うと、ミレーナは安堵したのか胸をなでおろし、椅子に腰かけた。

「ありがとうございます……すみません、少し気が抜けてしまいました」

心からほっとした表情のミレーナに、カイルは内心苦笑する。

（まあこれだけお膳立てされればな……）

ここに来るまでの街中や大聖堂で漂っていた不穏な気配と、そこに現れた英雄に期待するかのよ
うな雰囲気、そして助けを求める王女……吟遊詩人の詩にでもありそうな状況だ。

これが頼みの綱であるカイルに断られないようにするための演出だったとしたら、当然仕掛け人
はミレーナになる。

カイルは戴冠式への出席を適当な理由をつけて断ろうとしていたくらいなので、少しでも頼みを
聞いてくれる可能性を上げようという、いわば苦肉の策だ。

（……彼女らしくなかったが、それだけ切羽詰まっていたんだらうな）

「このお礼に、何をもつて報い（むく）ればいいのでしょうか……そうだ、前々からお話ししていました爵
位の……」

「その話はまた後で」

少し余裕が出来たのか、隙あらば取り込もうといういつものやり取りが始まる。

ミレーナの調子が戻ったことに苦笑しつつ、嬉しく思うカイルだった。

すぐに予行演習を再開せねばならないミレーナの前から、カイルは丁寧（ていねい）に辞去する。

「それでは失礼いたします」

「はい……ありがとうございます。カイル様のおかげで気分が楽になりました」

そう言うミレーナの眼は、先ほどまでの助けを求めるそれではなく、いつもの強い意志を感じさ
せるものになっていた。

これならどんな困難にも立ち向かえるだろう、と思いつつカイルは退室する。

部屋の外では、キルレンと二ノスが緊張した面持ちで待ち構えていた。

「事情は聞きました、及ばずながら力になります」

カイルの言葉に二人もほっとしたようだ。

「……不甲斐ないことは解っています、私達だけでは万全とは言えません。カイル殿の力をお借りしたい」

自分の力不足を嘆くように拳を握りながら、悔しげに言うキルレン。

二ノスの方はと言えば、この前と違ってやや複雑な顔だ。

カイルの協力を得られたことに安堵しつつも、普段はなるべく主人に近づけたくないという態度をとっているのに危機の際には頼るという、自分の厚顔無恥を恥じているようにも見えた。

「あの……ミレーナ様のことをお願いいたします」

だが自分のことなどどうでもいいとばかりに、懇願するように深々と頭を下げる二ノス。

余計なことを言うべきではないと思ったカイルは、頷くことで答えた。

この後二、三の必要事項を確認した後、カイルは急ぎ皆のもとへと向かい、用意された宿に着いたときには日も暮れかけていた。

そこは上級の宿で、一つの階を貸し切っており、皆は大部屋で思い思いにくつろいでいたが、カイルの姿を認めるとすぐに集まる。

「戻ってきた時の顔見たらすぐ解ったよ、カイルがまた何か厄介事を引き受けたって」

カイルが二日後の戴冠式で戦闘が起るかもしれないと説明すると、リーゼが当然のことにように受け入れた。

「断るのは無理でしょうね。関係なかったり敵対してたりする相手なら切り捨てるのに躊躇しないけど、少しでも縁ある相手を見捨てるのはカイルには難しいわ」

多少呆れも混じってはいるが、ミナギも仕方ないとばかりに納得している。

「カイルさんは優しいですから……」

「これに関しては優しいというより、甘いかお人好しか……あとは個人的な好き嫌いの類だとは思うがな」

サキラが一応のフォローを入れるが、ウルザがそれを否定する。しかしその表情も口調も責めているものではなく、どこか優しいげだ。

「そもそも世界の危機をいくつか抱えている身だからな、今更この国の危機の一つや二つ増えたくらい誤差の範囲というところか」

何やら超越した目線で語るのはシルドニア。

「一応はこの国に住んでいる以上、放置しておいていい問題じゃねえってところか……面倒くせえけど」

さっきまで昼寝していたセランが、しゃあねえな、と欠伸交じりに言う。

皆、遠慮容赦のない反応だが、勝手に引き受けたことを当然のように受け入れてくれていることが、カイルにはありがたかった。

「とはいえ、戴冠式って明後日^{あさって}だよな、もうちつと早く言えねえもんか？」
時間がねえな、とセランがぼやく。

「そういうわけにもいかないでしょう……ジルグス国ほどの大国となれば体面や体裁というものがあります。今回のような国の根幹に関わる問題は自力で解決すべきことです。ミレーナ様もお辛かったはず……」

「まあ無理もなかるう、上に立つというのはそういうことだ」

サキラがミレーナの苦しい立場を代弁するかのように言い、シルドニアもうんうんと頷いた。

「そしてどうしようもなくなったから英雄に助けを求める……向こうとしても最後の手段といったところか」

「苦境にあるだろう王女に求められ、手を差し伸べる……英雄としては模範的よね」

致し方ないこと、とばかりに同意するウルザと、カイルを見ながら茶化^{ちやか}すように言うミナギ。

「まあ色々お膳立てされたようだからのう、応えないわけにもいくまい」

ミナギに続いてシルドニアからもからかわれ、カイルは軽くため息を吐く。

「でもよ、襲撃があるという前提でいくとしても……事前にできることはあんなねえよな」
セランの言う通りで、打てる手は限られている。

そもそも敵の正体が判明していないし、何より本番は二日後であり、何かするとしても明日一日しかないのだ。

揉め事を避けるため、戴冠式ぎりぎりに到着する日程にしたのが裏目に出た形だ。

「要するにカイルお得意の悪だくみはできないということだな」

「時間がないというのは同意だが、人聞きの悪いことを……」

ウルザの指摘をカイルは否定するが、説得力はなかった。

「戴冠式そのものを延期や中止にする……ってわけにもいかないよね」

自分で言うっておいて流石に無理だと撤回するリーゼ。それはジルグス国として負けを認めるようなものだし、何より根本的な解決にはならない。

「情報収集くらいはしてみた方がいいわね」

無駄かもしれないけど、とミナギが言う。

彼女にとってこの手の情報収集はお手の物でも、一日では流石に限界があるだろう。

「それについては連絡係を用意するぞうだ。向こうで解っていることや調べたことを知らせてくれる」

「ならそれを聞いた上で動いてみるわ」

「頼む……だが気を付けてくれ、既に何人か犠牲者が出ているようだ」

カイルの忠告にミナギは頷く。

「俺もできることをするか……」

時間のない中、そう決意するカイルだった。

5

翌日、ミナギは連絡係と会いに行き、セランとシルドニアはそれぞれ街に出た。

カイルはリーゼとウルザ、サキラと連れ立って、商業区画の中でも王都の中心部に近い、貴族などが利用する高級な店が並ぶ場所にある、石造りの頑丈な建物へと向かう。

「ここは何の店なのですか？」

「……ちよつとした行きつけってところか。リーゼ達とは来たことがあるが、サキラとはまだだつたな」

ここは武器屋なのだが、扱うのは最高級の品で、中には城を土地と使用人付きで購入するのと同等の金額の鎧すらあるような店だ。

カイルは初めてここに来た四年前以来、何度か利用している。

「これはこれはカイル様、お久しぶりでございます。ようこそおいでくださいました」

店頭で直立不動で待ち構えていた店員に案内されて店内に入ると、満面の笑みでカイル達を迎えたのは店主であるフェスバで、その背後には全店員が勢ぞろいしている。

そもそもそう賑やかな店ではないが、他に誰一人客はおらず、貸し切りになっていた。

「気を遣ってもらったようだな」

カイルも名が知られるようになってからは、他の客や店側にも迷惑をかけないよう、前日のうちに往訪を伝えている。

勿論フェスバも『英雄御用達ごようたの店』というのを宣伝文句として使っているだろうから、お互いさまではあるのだが。

「いえ……お客様にこのような個人的なことを申し上げるのは商人として失格なのでしょうが、世界を救っていただき本当にありがとうございます。人族の一人として心からお礼を申し上げます」
魔族との戦争が終わってからは来店していなかったので、お礼も兼ねて改めてフェスバは深々と頭を下げた。

背後に控えていた店員達も同様に、特に新人らしき少年の店員は、憧憬どうけいと言つてもいい眼差しまなざしをカイルに向けていた。

本来なら物語の中にしか存在を許されない英雄が眼前にいるのだから無理もないが、慣れてきたとはいえ、カイルとしてはこの手の純粋な感謝にはいまだ困惑する。

（受け入れていくしかないのだろうか……）

そんな内心は見せず、最近はずっかり得意になった、とつてつけたかのような笑顔で応えるカイルだった。

「それで本日はどういった物をお求めでしょうか？」

「まずは彼女に合った防具を頼む……サキラ」

それまでカイルの背後に控えるように立っていたサキラが前に出る。

カイルがここにサキラを連れてきたのは、万が一に備え、戦闘能力のない彼女の身を守る防具を購入するためだ。

とはいえ非戦闘員であり、何より戴冠式に出席する身なので、大仰な防具をつけるわけにはいかない。

なので購入するのは、目立たないよう衣服の下につける、要するに下着を魔法で強化した防具になる。

それほど効果は期待できないが、やはりあるとないのでは大きな差があり、貴族などが好んでつける品だった。

「よろしく願います」

以前より大分よくなったとはいえまだ若干人見知りであるサキラだったが、この場にカイル達がいるというのも大きいのか、ややぎこちないながらも笑顔のまま受け応えてきている。

サキラの名を聞き、フェスバはともかく他の店員からは僅かながら動揺の気配が生じる。

人族最古の王国であるスーラ聖王国^{せいおうこく}を治め、最も神に近い人族として崇められている聖王家の中でも『輝かしき』の二つ名を持つ聖女サキラその人である。

本来なら次期聖王になるはずだったが、魔族との戦争の最中^{さなか}カイルと恋に落ち、聖王の座を投げうってまで嫁いだ……これが世間に伝わっている噂だ。

詳細は事実と違うところもあるのだが、そんなサキラがカイルと一緒にいるところを見て、一同は噂が事実だったと改めて実感したのだろう。

「じゃあサキラ、選ぶのを手伝うから。あまり多くないけど種類あるし」

「私達もつけているからな。結構着け心地も違う」

「はい、ありがとうございます」

リーゼとウルザ、サキラの三人は、女性店員に先導され、^{かしま}姦しいという表現がよく似合う雰囲気
でわいわいと、奥の試着室へと向かっていく。

そんな女性陣の様子を見てまた一つ、女性店員からの視線が少し冷ややかになったのは気のせい
だと思いたいカイルだった。

「コホン……あとは魔法薬^{まほうやく}と魔石^{ませき}の在庫を全部見せてくれ」

軽く咳払い^{せきほらい}した後、気を取り直したカイルがフェスバに話しかける。

「かしこまりました、こちらへどうぞ」

注文を予想していたのか、奥の部屋では、大きめのテーブルに所狭しと魔法薬や魔石が並べられていた。

「……相変わらず良い品質だ、全部購入する」

手に取って品定めを終えたカイルが事もなげに言うと、フェスバは何やら懐かしむように目を細める。

「どうかしたのか？」

「いえ、初めて来店された日を……四年前を思い出しまして」

「よく覚えているな」

「あのような買い物をされたのは後にも先にもカイル様だけです」

そのときの一回の買い物で使った額は約一千万ガドル。普通の庶民なら千年近く暮らしていけるような額であり、生涯忘れられないと言いたげだ。

当時は無名だった客が、今では世界を救った英雄になったことに感慨深げな様子でもある。

「あと少し聞きたいことがある……最近マラッドで何か変わったことはないか？」

「変わったことでございますか？ 最近では戴冠式の話題で持ちきりですが……」

「何でもいいんだ、マラッドには昨日着いたばかりだからな。何か異変……気になった点だ」

抽象的ですがまないが、と言うカイルに首をひねるフェスバだったが、やがて何かを思い出す。

「強いて言えば……最近地震が多いような」

「地震？」

地盤が安定しているのか、ジルグス国で地震が起こることは滅多にない。

「はい。と言ってもごく僅かな揺れですが、特にここ数日感じておりまして……不確実な話で恐縮

です」

「いや……参考になった。礼を言うよ」

何やら考え込むカイルの様子から何かを感じ取ったのか、フェスバが僅かながら顔を曇らせる。

「最近宮殿の様子が妙でしたが……もしや明日の戴冠式で何か起こるのでしょうか？」

フェスバには商売柄、独自の情報網でもあるのだろう。現在何かが起こっていると、ある程度解っているかのようだ。

「あくまで念のためだ……そして解つてるとは思うけど、他言無用で頼む」

「申し訳ございません、余計な詮索をいたしました……ご武運をお祈りしております」

フェスバは深々と頭を下げて、カイルの幸運を願った。

魔石と魔法薬を大量に買い込んだ後、カイル達は街中を歩いていた。

名目は情報収集ではあるものの、何かあてがあるわけでもなく、怪しい点でもないかとうろついているだけだったが。

「明日が戴冠式だから、やっぱりいつものマラッドより賑やかだよな」

「そうだな、治安はむしろ普段より良さそうだ」

リーゼとウルザがそんな呑気な会話をしながら、出店を横目に大通りを歩く。

「確かに平和そうですね……まるで何事も起きていないかのようです」